

【冒頭】

代表取締役 社長 鈴木勇人（以下、鈴木）

「みなさん、こんにちは。本日はファン感謝祭にお越しいただき、ありがとうございます。

また、日頃よりクラブの活動へのご理解、応援を頂き、ありがとうございます。

さて、先日行われましたサポーターの代表者の方との意見交換の中で、8月30日（土）に発表させていただきましたエンブレム変更の経緯を詳しく教えてほしいというご要望をいただきました。（発表）当日の30日につきましては、突然の発表、併せてキックオフ前で時間がない中でしたので、詳しく丁寧にみなさまに説明することができませんでした。

本日はファン感謝祭の前であります、少しお時間をいただきました。よろしくお願いいたします。」

【スタジアムについて】

鈴木

「本題に入る前に、かなりの問い合わせをいただいております『スタジアムの場所はどこなのですか？』という話を、今現在でわかっているところまでご説明したいと思っています。

結論から申し上げますと、まだひとつに絞り切れておりません。現在、候補地を選定中でございます。これにつきましては、福島市の協力のもと、地権者との交渉をはじめ、さまざまな可能性を探っています。その中で、3か所程度に絞られました。ここから手続き、手順を踏んで確定してまいります。

我々としては、できれば年度内ぐらいに敷地の確定を目指しております。確定しだい全体の工程が決まります。基本構想は終わりましたが、建設工事の単価や物価が高騰しておりますので、それをできるだけ縮減する案などを検討している段階に入っている状況です。敷地が確定次第、実施設計を進めて、工事に着工したいと思っています。工事におきましては、民設民営、あるいは公設民営のさまざまな発注形態がありますが、できるだけ早期にスタジアムの整備にかかっていきたいという状況でありますので、もう少し具体的なことが分かりましたら、またみなさまに共有をさせていただきたいと思っています。

（新スタジアムは）非常に注目を浴びており、世界的な3大建築雑誌にも取り上げられました。木造化というのは、非常に重要な問題であります。まだ原発の影響がある相双地区の林業の風評被害がかなり大きいです。県内産の木材100%で製作という試みと合わせて、県内の森林組合と連携を始めており、ある程度部材は確保できるところまで来ています。

今後は新スタジアムのワークショップを開催し、木材に関する知識を共有しながら進めていきたいと思っておりますので、ぜひご期待ください。」

【エンブレムについて】

鈴木

「さて、本題の新エンブレムについてですが、コンセプトとしましては、エンブレムのモチーフであるフェニックス(不死鳥)を踏襲し、よりシンボリックかつシンプルに表現するということを、大前提にデザインを進めてまいりました。

不死鳥のごとく、未来永劫、不屈の精神で、東日本大震災を乗り越えてきたクラブですので、そこを象徴しながら、今後は福島を世界に向けて発信するために準備を進めてきました。

『なぜ、こういう形になったのか』というところを少しお話します。まず、我々は 2024 年の 4 月の株主総会におきまして、筆頭株主が変わり、新役員体制になりました。

そこでクラブの存続が決定しました。極端に言いますと、2023 年の秋口に「福島ユナイテッド FC は運営できない」という状況になりましたが、我々は次のシーズンも予算を決めて動き始めていました。次のシーズンの開幕はすでに決まっています。そこに向けて準備をしなければならぬという時だったので、相当苦労しました。

複数の企業が手を挙げていただき、そこに決まりかけていました。しかしながら、そうなった場合は、すべてのスタッフ、監督、選手を含めて、全員交代というぐらいの状況でしたが、なんとか現状の形でやっていただけるオーナーを見つけるように調整をいたしました。

多くの企業にお声がけをしても、残念ながら、誰も手を上げることはなかったです。ただこのクラブをなくしてはいけないという思いで、当時招聘した副社長の辻上と相談して、『必死になってお互いやれることはやろう』ということで、スポーツ X が現在では経営に参画し、CEO である小山の交友のもとに現オーナーの会長寺部と、もうひとりの筆頭株主の方のご尽力により、クラブが成り立っています。

2024 年の 4 月の株主総会より新体制となり、今後のクラブをどうしていくかということを経営で議論しております。しかしながら、これまでの運営方針では、将来に向けた展望は厳しいという結果でありました。現在、株主総会、取締役会では、将来的なクラブの発展のために、まずこれまでに続いたクラブの歴史、変遷を尊重しながら、将来を見据えて、とにかくクラブの価値を上げようと取り組んでいます。

サポーターをはじめ、お世話になった地域みなさまへの、敬意を払いながら、新たなクラブ作りの必要性、クラブの価値向上に向けて、議論を今でも重ねております。

クラブの理念でもあります、未来永劫クラブを発展、成長させるためには財務基盤の大幅なこれまでにない向上が必要だということと、新しいクラブの価値を構築するというのが非常に重要になります。その上で、クラブの大きな課題として、環境整備について2つ、とにかく早急に整えようという形になりました。

まず1つ目は、超育成型のクラブにすることです。今までは少し強くなると、少し活躍すると、すぐ上のカテゴリーからチームに選手を抜かれてしまう。それであれば、福島で小さい頃から育って、アカデミーからトップチームに昇格して活躍していただけるような環境が必要だと。十六沼公園も実はアカデミーはまだ抽選で練習をさせていただいている状況です。そのような状況から脱却が必要だということで、まずアカデミーのトレーニング施設として、スマートスポーツパークを早急に作ろうと、スタジアムと一緒に候補地を選定中です。

もうひとつ、クラブの特徴となる場所としてスタジアムが欲しいと思っています。スタジアムはクラブやみなさまの思いを体現できる場所です。現在はとうスタを使わせていただいております。いつも取締役会内で話題になりますが、雨の中、寒い中、濡れながら、必死に応援いただいている姿を見たとき、なんとか1日でも早く、屋根付きのスタジアムを作りたい。そんな思いで我々はおります。

この2つの設備を早期実現のために新たな大口の資金調達が必要です。そのためには、スポンサーの獲得が不可欠です。しかしながら、福島はなかなか経済事情の厳しいものがありますので、中東、中国、ヨーロッパなど国内外の方々にお話をさせていただいております。その中で、慎重かつスピーディーに数十億円規模のデリケートな交渉を今、進めているところです。

2026年にクラブの運営会社としては15周年を迎えるということに併せて、Jリーグのシーズン移行があり、日本サッカーが変わるので、クラブとしても中途半端ではなく、区切りの時に大きな変革をもたらすのがいいのではないかという話になりました。

これまでは実現性がなかったスタジアムの整備についても、株主のみなさまや新しくパートナーになっていただいた方々がおります。そのような方々のおかげで、実現性が高まりました。

クラブのスピリットを継承しながら、もう1度クラブをやり直して、福島を世界に発信するために、新しい価値を生み出そうというところから、このクラブのプロパティの変更に至りました。

何もしなければ、たぶん停滞して終わるだろう。その中で、いろんな思いがあります。私も今のエンブレムで、地域リーグからJFLに上がり、震災も乗り越えました。しかしながら、1歩を踏み出さなければ生き残ることができないという思いで決断をした次第であります。

では、どのような決め方だったのかというところをご説明申し上げますが、新体制の中でこれまでも使っているプロパティすべてにおいて、実はネーミングにまで、話がありました。それも含めて、慎重に議論してきました。エンブレムの変更は、クラブにとって本当に重要な事項です。2024年の秋口ぐらいから、この問題に取り組み始めました。現在のエンブレムを少し変更、中間(程度の変更)、シンプル(なデザイン)に変更するということも含め、約20前後の案があがり、取締役会、部長会で話をさせていただきました。複数のデザイン案から慎重に修正を進めました。最終的には、現エンブレムの要素を少し入れながら、かつシンボリックにシンプルにして、アパレルでも使えるようにしました。今のエンブレムへの思いはゆるぎないものなので、その点も心にとどめながらデザインを確定して、取締役会に上げました。同会では会長以下、役員、社外取締役、会計監査役等で構成されています。特に地元企業を代表する方々が社外取締役に3名おります。私も地元ですので計4名。同取締役の1人1人に確認をしながら、議論してまいりました。周りからさまざまな意見が出ているが、前を見て、新たなチャレンジして変更するというのは必要だろうという結論のもとに全会一致で、今回の案が承認されました。

その後、部長会にて手続き、申請の諸問題も解決しながら、シーズンが移行する2026年の夏に間に合うように申請を進めました。併せて商標登録を取る形になりますので、6月24日にプロパティ変更をJリーグに提出し、7月3日で可決されました。その後、商標登録の申請を行いました。商標登録の申請を出すと、その段階で公開になってしまいます。クラブの発表前に、一部の方々が分かってしまうのは、避けなければならない。それはファン、サポーターへの裏切りになってしまいます。それであれば、多くの方々がいる場で発表すべきということになり、8月30日の発表になりました。

これから前を向いて、トレーニング施設とスタジアムの整備をしなければならない。クラブ全体が今までのものを継承して変わって、新しいクラブになって、未来永劫100年先も残っていくようにしたい。

(エンブレムの決めた方には)さまざまあると思います。みなさまに聞いて、じっくり決める方法など。ただ、我々は時間がない。1日も早く、この問題を解決して、整備を進めなければなり

ません。一般的な会社であればコーポレートアイデンティティと言い、ロゴマークや形を作るときにできるだけ外には漏らさず、作り上げて発表をします。その手法を今回は取らせていただきました。ただ、発表の仕方としては短い時間で、かつスタジアム発表で楽しみにしていたところで新エンブレムの発表をするという手順については、我々も反省しなければならないと十二分に思っておりますので、ご理解いただきたいと思います。」

【質疑応答】

鈴木

「最近の私も立場が少し変わって、今まではスタジアムのファン、サポーターのみなさまに、顔を出しながら話をしていたのですが、とにかくパートナー、来賓、見学者、応援、支援をしたいという方が非常に多くて、このような機会が取れるのはありがたいと思いますので、ご質問いただければと思います。」

質問者①

「新エンブレムの使用開始はいつからですか？」

鈴木

「シーズン移行する 2026-27 シーズンから使用を考えております。それまでは移行期間として、Jリーグへの手続きはまだ残っているので、終了次第、お伝えしますのでしばらくお待ちください。」

ただ、実際はアカデミーの新シーズンが 4 月からなので、特許庁の承認のタイミングも含め、関係各所と調整したいと思います。」

質問者②

「クラブカラーの変更はあるのでしょうか？」

鈴木

「エンブレムの変更はしますが、我々としては『赤と黒の勇者』とみなさまから言っているのは重要なことだと思っていますので、今現在クラブカラーの変更予定はございません。」

質問者③

「エンブレムの王冠はどのような意味があるのでしょうか」

鈴木

「我々にとって、不死鳥は非常に大きなものだと思います。現エンブレムにも王冠が載っています。やはりタイトルを取りたいという思いが込められています。100 年続くクラブとして、今は力が足りないですが必ずトップを目指すという姿勢を表しています。」

質問者④

「経営の部分についての説明ありがとうございます。説明の文脈からだと、クラブの存続が危ぶまれていた中での決断ということですが、極端に言うと、エンブレムを変えなければ、生き残れなかった。という認識でいいのでしょうか？」

鈴木

「ありがとうございます。これについては、いろんな考え方がありますが、実際には変えなければいけなかったかというのは、その時になってみないと分からない状況です。我々としては新しくするのが最善だろうということで決断しました。」

【最後に】

鈴木

「本日はありがとうございました。本当はファン感謝祭を楽しみにしていただいているところで少ししんみりとした話になり、申し訳ございません。昨年、プレーオフ進出して、クラブへの期待は高まりました。今年も(J2 昇格を)本気で狙っています。まだ諦めていません。最後の最後まで戦い続けます。それを含めて、今日はみなさまには選手と触れ合っていて、最後の勇気づけ、後押しをしていただき、最終節まで頑張りたいと思いますので、ここからは楽しんでいただければと思います。本日はありがとうございました。」